

書名： もりのへなそうる

著者：わたなべしげおさく

やまわきゆりこえ

出版社：福音館書店

出版年月：1971年12月

総ページ数：151ページ

ISBN：4834002985



推薦者

山田芳明

鳴門教育大学大学院准教授

芸術系コース（美術）

～読み継がれるたのしみ～

私がこの本と出会ったのは小学校の低学年の頃のことだ。この本は、小学校に上がる前から絵本が好きであった私に、絵の少ない長い物語を読むことを楽しむきっかけを与えてくれた。てつたとみつやという幼い兄弟が家の裏の森を冒険し、そこで大きなたまごを見つけ、不思議な生き物と出会って友だちになって遊ぶという物語である。幼いけどお兄ちゃん然としたてつた、「たがも（たまご）」「しょっぴる（ピストル）」といった言い間違いをする弟のみつや、子どもたちの質問にとぼけた応答をするへなそうる、そして子どもたちの話をおおらかに受け止めるおかあさん、個性豊かな登場人物に私は物語の世界へと引きこまれた。また、風景や登場人物の挿絵が物語を一層魅力的にした。表紙の見返しに描かれた森の風景、川遊びの様子、てつたが描いた地図、子どもたちやへなそうるの表情、おかあさんがたんけんのでかける子どもたちにつくってくれる「おべんと（おべんとう）」のたらこおにぎり。私は、絵から想像して楽しみ、言葉を楽しみ、お話を楽しみ、何度も何度も読み返した。今思うと、この本に描かれた世界は、幼なかつた頃に「遠くへ行ってみたい」との思いから近くの川の土手を川上に向かって上っていったり、家の近くのお寺や神社の雑木林で日が暮れるまで遊んだりした私自身の実体験と混ざり合い、私の原風景の一部となっている。

今、手元にあるこの本は当時のそれではなく、二人の息子たちが私と同じぐらいの年齢の時に彼らに贈ったものである。彼らもまた、みつやの「たがも」「しょっぴる」といった言い間違いや、へなそうるが「かにさされた」を「かににさされた」といって子どもたちに笑われてしまう場面をおもしろがった。はたして、この本は彼らにとっても原風景の一部になっていくのだろうか。その答えはもうしばらく待たねばならない。それもまた楽しみである。

